地域連携・フロンティアセンター

平成 28 年度実績報告

日本赤十字看護大学 Frontier Center
地域連携・フロンティアセンター

目次

Ⅰ．目的と運営 1
A. 目的 1

B. 組織運営 1

Ⅱ．事業 3
A. 研修部門 3
1. フロンティアセミナー部会 3
2. スキルアップセミナー部会 6
3. 実習指導者研修部会 11

B. 地域連携部門 19
1. ケアリング・フロンティア広尾 19
a. リサーチフェスタ 19
b. My Turn（私の出番！）プロジェクト 21
c. 高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト 22
d. 広尾地域防災プロジェクト 23
e. TRC 研究会（Total Renal Care） 24
f. セルフケア能力を高める支援の検討会（SCAQ 研究会） 25
g. シームレスな看護師教育モデルの検討 26
h. 小児看護研究会　CandY　（Children and You） 27
i. UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース基礎セミナー 28

C. 災害看護部門 29
1. 武蔵野市地域防災活動部会 29
2. なみえプロジェクト 35
3. くまもと支援プロジェクト 36

Ⅰ. 目的と運営

A. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、大学がこれまで蓄積してきた知的・実践的ノウハウをもとに、人々に求められる看護の可能性を追求し、開かれた大学をめざして平成 17 年 8 月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターをその前身としている。新たな発想で創造的な活動を行う必要があるとの共通認識のもとにスタートして10年目を迎えた平成27年度、地域連携の推進をその活動の中心に据えることをその目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新しい出発となった。

本センター設置の目的は、本学の教育・研究に基づき、地域との連携・貢献、社会への発信・貢献である。そのために果たす機能は主に以下のとおりである。

（1）地域連携の推進に関する事業の企画実施に関する事項。

（2）生涯学習等に関する教育内容・方法の研究に関する事項。

（3）公開講座、セミナー等の企画運営に関する事項。

（4）看護実践・教育・研究に関する事項

B. 組織運営（図1）

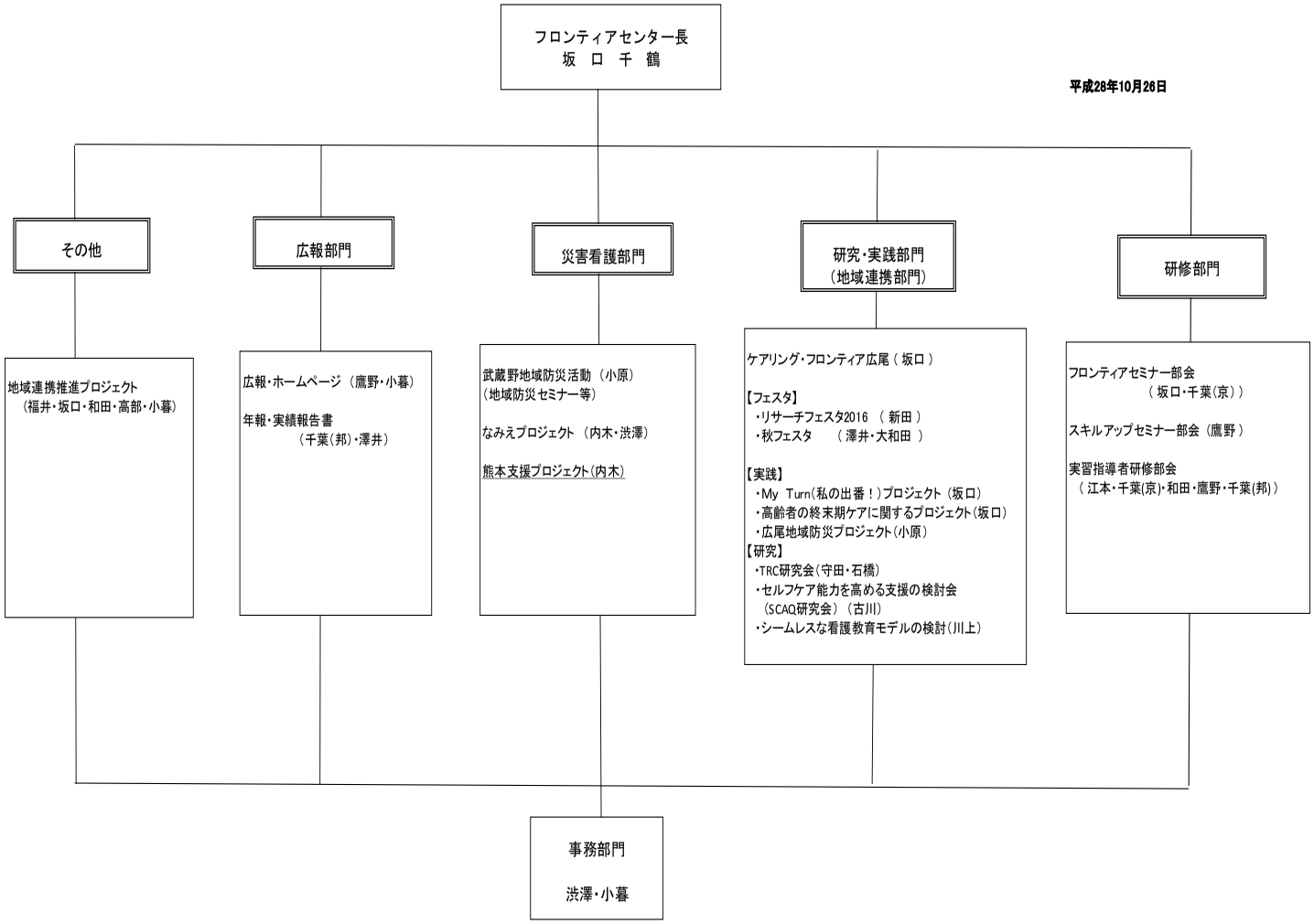
フロンティアセンターの活動は、①研修部門として、フロンテイアセミナー部会・スキルアップセミナー部会、実習指導者研修部会、現任教育担当者研修部会、②地域連携部門としてケアリング・フロンティア広尾、③災害看護部門として武蔵野地域防災活動部会となみえプロジェクトに大別され、今年度新たに地域連携を推進するためのプロジェクトが発足したところである。

同センターの運営は、地域連携・フロンティアセンター運営委員会において検討している。運営委員会は、平成 28 年度は年 11 回開催し、①年間計画及び会計・予算、②各事業の運営等について検討した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。平成 28 年度の各事業実施にあたっては、学内の教職員のほか前年までの事業の参加者、修了者など幅広い力を得て運営した。

平成25年度より開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は4年目となり、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社附属乳児院と協働の独立した組織として各プロジェクトを定着させるとともに新たな可能性を探り始めた。災害看護支援活動のうち、武蔵野地域防災活動は長年にわたる実績をもとに武蔵野市との協定を結び、多くの市民の方の参加を得て実施している。浪江町健康支援は平成28年度をもって本社からの支援を終了し、次年度からは本学だけで支援活動を行っていくことになっている。認定看護師教育課程は平成26年度末をもって閉講したが、認定看護師へのスキルアップセミナーは大変ニーズが高く多くの修了生等の参加を得て継続開催している。

今後は本センターが中核となり、大学と地域社会との連携の一層の強化をめざし、新たな組織体制と活動を推進していく予定である。

平成28年度　日本赤十字看護大学　地域連携･フロンティアセンター運営組織図



Ⅱ．事業

A. 研修部門

1. フロンティアセミナー部会

平成 28 年度のフロンティアセミナーは実習指導者研修会共同企画とした。テーマは「看護を担う人材育成をデザインする　～実習指導者研修会の学びを発展させて～」である。

a. フロンティアセミナーの趣旨

過去 3 年間のフロンティアセミナーでは、「シームレスな人材育成をデザインする」というテーマを掲げ、看護大学・大学院が持つ教育的な機能を活用した人材育成の提案、病院全体に教育的関心を育成するような組織文化を醸成することの重要性とその具体的方略を報告してきた。また、本学では赤十字系の実習施設と協同企画し、実習指導者育成を目的とする「実習指導者研修会」を開催している。今年度は研修会開始から 4 年目を迎え、受講修了した看護職は実習指導の経験を通し、実践能力の強化と、教育技法を駆使して意図的な関わりを習得しつつあると考える。このような状況において、自己の役割の理解と自己の教育的能力の強化に重点を置き、今後のキャリアデザインを考える機会の提供も重要と考えた。

このようにフロンティアセミナーと実習指導者研修会は、独自に大学・大学院が持つ教育的な機能と病院組織との連携が看護を担う人材育成にとって重要であることの認識と方略について実践的に示してきた。そこで今年度は共同企画とし、学習者やスタッフの教育に携わる看護職者が組織における自己の役割の理解と自己の教育的能力の強化を目指し、今後のキャリアデザインをどのように考えていけばよいのか、参加者と共に考えるセミナーを開催することとした。

b. フロンティアセミナー開催内容

平成 28 年度のフロンティアセミナーは、平成 28 年 11 月 30 日（水）13:30～16:00、日本赤十字看護大学 201 講義室で開催した。参加者は 220 名（学外者 206 名のうち実習指導者研修会受講生 63 名、大学院生、学内教員）であった。

フロンティアセミナーの内容は、基調講演と実践報告で構成した。基調講演は、本学看護教育学領域西田朋子准教授より『「教える」を超えた「学び合い」の実現へ　～現場で他者の成長を支援する人の役割～』と題して講演があった。講演内容は、看護師が臨床において看護実践能力を培い成長していくには経験が重要であり、それは看護専門職をめざす学生にとっても同じであり、経験そのものをしていくときや、その経験をもとに学びを展開する際には他者からの適切な教育指導、支援があることによって、よりよく成長していくことが可能になる。医療現場で他者の成長を支援することの意義や成長を支える人の役割や機能について、基本となる考え方や経験学習論などを含め、臨床で人を育てることへの関心が高まる示唆に富んだ内容であった。

次に、本学における実習指導者研修会の修了生 2 名による実践報告を行った。横浜市立みなと赤十字病院　城下香さんより『実習指導者研修会での学びを実践に活かす　～経験の意味づけを大切にした関わりを目指して～』をテーマに報告があった。小児看護は子どもの成長発達だけではなく個別性に合わ

せた看護が求められると城下さんは考え、実習指導では言葉で表現できない子どものニーズを捉えられるように学生に関わり、学生自身が考えて行ったケアを一緒に振り返り、経験を意味づけることを大切にしている。実習指導者研修会での学びを基盤に、実習指導を実践していることが発表された。もう 1 名は、葛飾赤十字産院　渡邉友里恵さんより『学生指導って楽しい！　～学生指導を通した学びと理想～』をテーマに報告があった。学生指導は、学生の成長を手助けすると共に、指導者である自分自身の成長にも繋がると渡邉さんは考えている。学生の日々成長していく様子をみる喜びに加え、指導者として日々悩みつつ、試行錯誤しながら乗り越えてきた経験やそのやりがい・楽しみが語られた。実習指導の経験を振り返り見えた課題を伝えることが、後輩の参考になればと発表された。

報告の後は、実習指導に関する悩みや考え方についてフロアーから質問があり、西田先生や報告者が回答した。

c. フロンティアセミナーの評価について

参加者 197 名からアンケートの提出を得ることができた（回収率 89.5%）。基調講演について「とてもよかった」「よかった」と評価した方は 9 割以上、実践報告も「とてもよかった」「よかった」と評価した方は 9 割弱であり、高い満足感を提供することが出来た。しかし、参加者数が予想を上回り、会場が満席に近い状態となったため、室温の調整や荷物置き場の余裕がなくなったことが反省点として残った。

セミナーへの今後の希望テーマについて自由記述で回答を求めたところ、「西田先生の実践的な内容の講義」「発達障害のある学生との関わり方」「実習指導、新人指導を行ううえでの職場環境づくり」「看護倫理」「地域包括ケアシステム」「リフレクションのやり方」等の回答があった。

4 年間に渡る「大学と病院との連携」を中心にフロンティアセミナーを開催してきたが、今後は本委員会の関連研修会である実習指導者研修会との連携なども含め、時代のニーズを捉えつつ展開したいと考える。

平成 28 年度　日本赤十字看護大学フロンティアセミナー（実習指導者研修会共同企画）
「看護を担う人材育成をデザインする　～実習指導者研修会の学びを発展させて～」
アンケート結果

回収アンケート枚数　197 枚（事前申し込み（学外）者 206 名, 参加者 220 名, 回収率　約 89.5%）

１．セミナーを知った情報源　　※複数回答あり

①チラシ・ポスター　46 名　　②セミナー案内　39 名　　③本学ホームページ　1 名
④友人・知人　　8 名
⑤その他　39 名（病院のすすめ、上司のすすめ、師長のすすめ、看護部のすすめ、
病棟スタッフの誘い、病院の研修案内、等）
⑥実習指導者研修会プログラム　68 名

２．セミナーの内容について

	とても よかった	よかった	ふつう	あまり よくなかった	よくなかった	未記入
基調講演	98 名	87 名	11 名	1 名	0 名	0 名
実践報告	76 名	99 名	11 名	1 名	0 名	10 名
セミナー全体	70 名	102 名	19 名	1 名	0 名	5 名
会場設備	59 名	84 名	40 名	7 名	2 名	5 名
スタッフ対応	71 名	91 名	30 名	0 名	0 名	5 名

３．ご意見・ご感想・お気づきの点

・実習指導者の話は具体的で指導者が何を考えて学生に接して指導にあたってくれているのかがわかって良かった。二人とも小児・母性系だったので成人・老年・精神の指導者の話も聞いてみたい。質疑応答が良かった。
・特に基調講演は臨床でのスタッフ指導を思い浮かべながら聞き、大変勉強になった。実習指導者が指導しやすい環境づくりと他のスタッフの協力体制の強化を行なっていきたい。
・プリセプターとして人を教える立場になって、とてもいい学びができたと感じた。講義の内容もとてもわかりやすく、現場でもすぐに役立てる内容です。学生指導にも興味があったので先輩方のお話が聞けてとても良かったです。
・看護教育学の講演では「批判的にオープンになるか」という点が興味深かったです。

４．今後の希望テーマについて

・西田先生の話を元に実践的な講義
・発達障害などの学生に対する関わり方の工夫など
・看護倫理について
・看護師のキャリアアップに関して（働き方、働く場所など）
・学生とのコミュニケーションスキル、時代の変化に合わせての講義
・多様化するスタッフたちへの指導、他多数。

2. スキルアップセミナー部会

a. 2015（平成 27）年度の活動状況

本部会は、年に 1 回開催している認定看護師スキルアップセミナーの企画・運営全般を担当する部会で、教員 4 名と事務職員 1 名により構成されている。

認定看護師スキルアップセミナーは 2015（平成 27 年）度より年 1 回開催されているセミナーである。これは、本学地域連携・フロンティアセンターにて行われていた認定看護師教育課程が 2014（平成 26）年度をもって休止されたことを受け、この時に休止となった「糖尿病看護」「認知症看護」「慢性呼吸器疾患看護」の 3 領域のコース修了生のフォローアップを教育課程休止後も継続的に行う目的で平成 27 年度から 3 カ年、実施することが計画されて開始された事業である。広く、認定看護師のスキルアップに役立てていただけるように、参加者は本学の教育課程修了生に限定をしていないため、全国各地から、この 3 領域のコース以外の認定看護師も多数参加している。

b. 2015（平成 27）年度認定看護師スキルアップセミナーの実施状況

今年度（3 カ年計画の中間年）の認定看護師スキルアップセミナーは、2017（平成 29）年 2 月 25 日（土）に開催された。本年は、総数 291 名（内訳：糖尿病看護 98 名、認知症看護 120 名、慢性呼吸器疾患看護 73 名）が受講した。臨床で働く認定看護師が継続的に参加できるように、開催日を毎年 2 月の最終土曜日に固定し、受講のために必要な勤務などのスケジュール調整を行いやすいように配慮している。

▲認定看護師スキルアップセミナー：受付の様子

今年度も前年度同様、午前中は全領域のコースが一堂に会して受講する基調講演とし、午後は、それぞれの専門性についての学びを深め、有益な情報交換、ディスカッションが行えるコースごとに分かれて行うセッション、というプログラムとした（プログラムについては、資料 1 参照）。

▼資料１　2016（平成 28）年度認定看護師スキルアップセミナー・ポスター

平成２８年度　日本赤十字看護大学
地域連携・フロンティアセンター　Frontier Center

認定看護師のためのスキルアップセミナー

日　時　：　平成29年 2月 25日（土）10:00～16:45　（受付開始10:00～）
会　場　：　日本赤十字看護大学　広尾キャンパス　広尾ホール　（東京都渋谷区広尾4-1-3）

午前の部（10:30～11:30）：基調講演
「ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか-感情労働の視点から-」
講師：武井麻子（日本赤十字看護大学　名誉教授）　座長：坂口千鶴

午後の部（13:00～15:30）：コース別セミナー ★下記のいづれかのコースを選択してご参加ください。

1. 糖尿病看護コース

テーマ「スタッフ教育～糖尿病看護の楽しさ・やりがいを伝えるために～」
講演13:00～14:00
講師：安酸　史子（防衛医科大学校医学教育部看護学科教授）
座長：豊島　麻美（武蔵野赤十字病院　訪問看護ステーション看護係長）
実践報告とグループディスカッション　14:00～15:30
木内　亮子（医療法人社団　筑波記念会筑波記念病院　筑波総合クリニック）
角出　孝子（舞鶴赤十字病院）
助言者：町田　景子（公益財団法人東京都保健医療公社多摩北部医療センター　糖尿病看護認定看護師）
村田　中（日本赤十字看護大学大学院　糖尿病看護認定看護師）

2. 慢性呼吸器疾患看護コース

テーマ：「病院から地域へ看護をつなげる―退院支援と診療報酬―」
講演13:00～14:00　「慢性呼吸器疾患患者の退院支援と診療報酬」
講師：松本　明子（聖路加国際大学　聖路加国際病院相談・支援センター
/療養サポート室　室長（ナースマネージャー））
座長：矢野目加奈子　（武蔵野赤十字病院）、砂押公美　（水戸赤十字病院）
実践報告と全体ディスカッション　14:00～15:30
下川　満美（独立行政法人　国立病院機構　福岡病院）
助言者：大塚　操　（旭川赤十字病院　集中ケア認定看護師）　山内　真恵　（武蔵野赤十字病院）

3. 認知症看護コース

テーマ「認知症看護における多職種とのチーム活動」
講演13:00～14:00　テーマ「ケアの受け手の尊厳を守るために認定看護師が果たす役割」
講師：藤原　麻由礼　（全国土木建築国民健康保険組合　総合病院　厚生中央病院）
座長：森　浩美　（東京大学医学部附属病院）
実践報告とグループディスカッション　14:00～15:30
雨宮　麻美子　（地方独立行政法人　山梨県立病院機構　山梨県立中央病院）
木田　直子　（公益社団法人　地域医療振興協会　磐梯町保健医療福祉センター介護老人保健施設りんどう）
渡邊　麻衣子　（社会福祉法人　大三島育徳会　特別養護老人ホーム博水の郷）
助言者：赤井　信太郎　（長浜赤十字病院　認知症看護認定看護師）

認定更新時のポイントとして申請することができます。セミナー受講修了後に修了証を発行します。

◆申込方法：　住所、氏名、所属先名、参加希望テーマの番号（午後の部）を下記のメールアドレス、または下記FAX番号宛てに送信してください。
◆E-mail：　skillupseminar@redcross.ac.jp　◆ＦＡＸ番号　：　03-3409-0589
◆参加 費：6,000円（お弁当・お茶・茶話会菓子付）　次の口座にお振り込みください。振込確認後に受講票を発送します。
振込先：三菱東京UFJ銀行　渋谷中央支店　店番：345　普通預金　口座番号：1267503
口座名義：日本赤十字看護大学（ニホンセキジュウジカンゴダイガク）
参加費は、受講する方のお名前でお振込みください。所属先名で振り込んだ場合、受講票がお手元に届かない場合があります。
◆問合せ先：地域連携課　電話 03-3409-0924（担当：小暮）　◆申込・参加費振込締切：　平成29年1月31日（火）

今年度の基調講演は、本学名誉教授であり、本学の認定看護師教育課程の「相談（コンサルテーション）」を長年担当されていた武井麻子先生に「ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか　ー感情労働の視点からー」というテーマでご講演いただいた。講演では「感情労働」の一般論にとどまらず、看護師が臨床において晒されている感情労働の実例が具体的に提示され、受講生にとって自身の臨床体験を振り返る機会となったのと同時に、職場の同僚たち、所属する病棟全体の状況、さらには病院が置かれている現状などについて広く洞察する機会となった。講演時間は当初 60 分を予定していたが、内容にあわせて 70 分に変更した。しかし、内容からすると講演時間があまりにも短く、感情労働により疲弊していく看護師たちのリジリエンスをどう育てるか、組織や社会はどのように対策をとるべきか、といったところまでを十分に取り扱うことができず、受講者たちからは「最後の感情労働をどう乗り越えていくのか、というところが短かった」「この内容を取り扱うには、60 分の講演では難しいのでは」といった意見も聞かれた。基調講演については、内容と講演時間の妥当性についての事前検討が不十分であったということが今年度の反省点であり、次年度の課題でもある。当日に回収した基調講演に関するアンケート調査の回答結果を分析し、2017（平成 29）年度の認定看護師スキルアップセミナーの基調講演の内容及び講演時間等の決定に活かしていきたいと考えている。

▲認定看護師スキルアップセミナー：基調講演座長の坂口フロンティアセンター長

▲認定看護師スキルアップセミナー：基調講演（武井麻子先生）

午後の領域ごとのセッションは、今年度も本学の認定看護師教育課程の修了生が積極的、主体的に当日のプログラムの運営を行い、3 領域のセッションともに盛況であった。3 領域それぞれにスキルアップセミナー部会の教員各 1 名が担当者として関わり、プログラムの円滑な進行に寄与した。なお、この担当教員は、1 年を通じて継続的に、各領域の認定看護師が主体的にセッションの企画・運営に携われるようなサポートを行っている。

プログラム終了後は、昨年度に受講生からの提案で実施され好評を得た茶話会を今年度も開催した。自由参加の会ではあるにもかかわらず、100 名以上の受講者が参加した。茶話会には、地域連携・フロンティアセンターの現センター長の坂口千鶴先生、前センター長である鶴田惠子先生のほか、本学にて認定教育課程に携わった教員も多数参加し、同窓会さながらの和やかの会となった。また、本学の教育課程修了生以外の参加者も多く、久々の再会を喜び合うのみではなく、この場を活用して、活発な意見交換や情報共有なども行われていた。坂口センター長、鶴田前センター長からは、この大学主催の認定看護師スキルアップセミナーという事業は来年度が最終年度であること、大学主催のスキルアップセミナー終了後もセミナーを継続するためには、受講生の主体的にセミナーを企画・運営していく意思が必要不可欠であること、もしニーズがあれば大学は受講生主体で開催するセミナーを支援する準備があること、が示され、「領域ごとに、セミナーを今後も継続していく意思があるのかどうか検討しておくこと」が次年度のセミナーまでの課題として提示され、今年度の認定看護師スキルアップセミナーは締めくくられた。

▲認定看護師スキルアップセミナー：茶話会で挨拶する鶴田前フロンティアセンター長

c. 2017（平成 29）年度の課題

認定看護師スキルアップセミナー部会としては、2016（平成 28）年度のセミナーにおけるアンケート（基調講演アンケート及び各領域のセッションに関するアンケート）結果を分析し、2017（平成 29）年度認定看護師スキルアップセミナーのプログラム案作成に着手するとともに、それと平行して 2018 年度以降のフォローアップのためのセミナーを継続していくのかどうか、本学の修了生を中心として各領域の認定看護師と連携し彼らの意向をききながら検討していくことが 2017 年度の最重要課題としてあげられる。

なお、2017（平成 29）年度が大学主催で行う認定看護師スキルアップセミナー開催の最終年であることから、本学がこれまで携わってきた前出の 3 領域のコース以外の領域の認定看護師教育課程の修了生も対象としたスキルアップセミナーにしてもよいのではないか、という案も出されている。これについても早急に検討し、現行の 3 領域のコース以外も対象とするセミナーを開催する場合は、迅速にプログラムを立案し、広報などを行っていく必要がある。

3. 実習指導者研修部会

本学における実習指導者研修会は、実習施設で既に実習指導を担当している、もしくは今後担当する予定の看護師を対象として平成 25（2013）年度より年 1 回、開催されている。　平成 27 年度からは、この研修会は地域連携・フロンティアセンターによる事業に位置づけられたため、本年度は地域連携・フロンティアセンターが主体となり運営を始めて、2 年目となる。

以下にまず、実習指導者研修会の概略を述べ、その後に本年度の研修会の実施状況等について報告する。

a. 概略

(1) 研修会の目的

本研修会は以下を目的として、平成 25 年度に立ち上げられた事業である。

・本学での看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげる。
・大学教員や自施設以外の実習指導者との情報交換の場とし、看護者としての視野を広げ自己成長の機会とする。
・実習での「ケアし、ケアされる」という体験を通して、学生が 4 年間にわたり成長していけるような指導体制を構築する。

(2) 運営の基本方針

本研修会は、以下の基本方針に基づき企画、運営されている。

・本学と実習施設が協働し、企画運営を行う。
・受講生が、本学教員や自施設以外に勤務する受講生と情報交換できる場を提供する。
・受講生が‘人を育てる’観を育める場を提供する。
・受講生には、研修修了時に「日本赤十字看護大学　実習指導者研修会　修了証」を発行する。

b. 平成 28 年度の実習指導者研修会

(1) 企画及び運営

本研修会の企画及び運営は、フロンティアセンターに設置されている実習指導者研修部会（本学教員 10 名により構成）が中心となり、日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する企画委員（各施設 1 名、計 5 名）と共同で行っている。

平成 28 年度は、実習指導者研修部会の学内会議を 5 回、さらに実習指導者研修部会と上記 5 施設各 1 名の企画委員 5 名から成る企画会議を 5 回開催し、本年度研修会の企画、開催準備、研修会当日の運営にあたった。企画会議では、研修会受講生のアンケート結果や講義の様子、各施設の本研修に対する要望などをもとに、次年度（平成 29 年度）の実習指導者研修会の企画及び準備も並行して行った。事務作業については、地域連携・フロンティアセンターを担当する本学事務職員 1 名が、この研修会の様々な作業を担い、研修会の円滑な運営に努めている。

(2) 平成 28 年度の実施状況

本年度は 6 月 22 日の開講式から始まり、5 日間の講義とオプションとしての本学での学部生の看護技術演習見学（老年、小児、母性、基礎、成人看護学領域）、受講生の勤務施設以外での実習指導の見学という平成 27 年度のプログラム構成を踏襲して実施し、平成 29 年 1 月 25 日に修了式・閉講式を挙行した。

▲「教育方法」の講義でのグループワークの発表
授乳中の褥婦と関わる学生の実習場面を演じている。

▲「教育方法」の講義での様子
各グループの発表をみている受講生。

▲修了式で挨拶する坂口千鶴地域連携・フロンティアセンター長

講義科目である「特別講義・教育方法」「対人関係論」「教育原理」「実習指導概論」「教育心理」「特別講義・看護管理」「特別講義・看護倫理」「看護学概論」は、受講生以外にも広く門戸を開き、聴講生制度を取り入れた。また、この講義科目の一部は、本年度採用の本学教員の FD（Faculty Development、大学教員の教育能力を高めるための実践的方法）及び大学院生の教育にも活用された。

表 1 は、平成 28 年度の研修会受講生及び聴講生の受講料一覧である。

表 1：平成 28 年度実習指導者研修会・受講料一覧

受講生・聴講生の所属	研修受講生	聴講生（1 講義につき）
企画委員が所属する実習赤十字施設	3,000 円	無料
実習施設（上記以外）	6,000 円	無料
赤十字施設	6,000 円	500 円
その他の施設	10,000 円	1,000 円
本学学生・教員		無料 ＊大学卒業生、修了生除く

＊実習施設とは、本学学部生の実習施設を指す

本年度に実施したプログラムで特筆すべきこととして、「OB 会」という新たなプログラムを立ち上げたことがあげられる。平成 27 年度の企画会議で、本研修を修了した実習指導者（以下、OB）のキャリアアップをはかるプログラム（OB 会）を組み込めないか、という要望が出され、企画会議及び地域連携・フロンティアセンター運営委員会等で検討を重ねた。その結果、11 月 30 日、地域連携・フロンティアセンター主催のフロンティアセミナーとの共催という形で OB 会が実現した。

このセミナーに、本研修会の平成 28 年度受講生も自由に参加できるように研修日程を配慮したこともあり、受講生全員がセミナーを聴講した。このことからも、本研修会の受講者が意欲的に研修に取り組んでいることがうかがえる。OB 会のプログラムの詳細は、フロンティアセミナーの項を参照いただきたい。資料 1 は、平成 28 年度に実施した研修会の日程である。

(3) 平成 28 年度の受講者

本年度の受講者数は 72 名であった。

聴講生は、各講義科目で毎回 15 名～29 名が聴講し、講義科目 8 科目の総計が 204 名であった。本稿の最後に掲げている資料 2 は、受講生に実施したアンケート結果の一部である。

(4) 平成 27 年度にあげられていた本年度の課題への対応

平成 27 年度の研修会終了後の方略として、①修了者向けのフォローアップ企画の具体化、②参加者募集方法の拡大があげられていた。①については前述の通り、本年度に OB 会という形で実現できた。②としては 4 月 1 日より地域連携・フロンティアセンターのホームページにおいて広報することを予定していた。しかし、ホームページのリニューアル作業が、当初の 3 月末終了の予定から 9 月にずれ込んだことが影響し、ホームページを媒体とした広報活動は十分には行えなかった。

c. 今後に向けて

企画会議では、平成 28 年度の実習指導者研修会を振り返り、さらに充実した実習指導者研修会を体現するための課題として、以下の点をあげている。なお、この課題については、既に平成 28 年度より実習指導者研修部会が取り組みを開始している。

(1) 事務作業の適確化および簡略化

現行の受講希望者の申込みは、受講希望者から受講申込書を郵送してもらう形態である。このため、データの入力作業に労力を要し、これまで起こってはないものの入力ミスの危険性も高い。また、毎回のプログラム終了後に実施しているアンケートの集計作業の負担も多大である。受講生および聴講生のデータを適確に取り扱い、かつ担当者の負担を軽減することは本研修開講当初からの課題であった。アンケートについては、平成 27 年度より Web 回答を試行的に導入し、平成 28 年度も紙ベースからの全面移行にむけて準備を進めている。また、受講生の申込みについても、Web 登録へと移行することも案として出されており、そのためには様々な環境を整備する必要がある。いずれにしても今後、受講希望者、事務作業担当者の両者にとってメリットが多く、デメリットが少ない申込み方法を確立していくことが求められる。

(2) 広報活動

平成 25 年当初は本学実習施設のみを対象としていた本研修会は、徐々に受講生を広く一般から募る体制へと変化している。そのため、広報活動の一層の充実は重要課題であり、その 1 つとしてホームページの有効活用があげられる。従来は、受講生募集記事のみをホームページに掲載していたが、研修会の様子を適宜、ホームページから発信していくこととなった。平成 28 年度は研修会初日の特別講義、研修最終日の修了式の 2 回の更新のみであったが、平成 29 年度にはさらにタイムリーに記事を発信することを考えている。

(3) プログラムのさらなる充実

次年度の平成 29 年度には、実習指導者研修会がスタートしてから 5 年目の節目の年をむかえる。

これまで実施してきたプログラム内容やアンケートによせられた受講生の意見などを分析・検討し、プログラムの見直しを行い、さらに充実した研修会へと進化させていくことが求められる時期でもある。

平成 28 年度の受講生の意見・感想からは、実習指導におけるリフレクションやプロセスレコードの読み解き方についての興味・関心が高まっていることがわかる。リフレクションについてはこれまで演習のみでとりあげていたが、今後は講義科目としての追加を、プロセスレコードについては「対人関係論」の講義内で取り扱っていたが、「対人関係論」の内容が「教育心理」の講義内容と重複するところが多いとの指摘もあるため、「対人関係論」の講義をプロセスレコードに特化した内容に変更するなどのプログラムの修正を、急務の課題としてあげている。

なお、最後となったが、この実習指導者研修会は、後援を快諾して下さっている日本赤十字看護大学同窓会からご支援を賜り、運営が成り立っていることを記しておく。

資料１　平成 28 年度　実習指導者研修会スケジュール

開催月日	時間	プログラムの内容	講師	場所
平成 28 年 6月 22 日（水）	9:10-9:30	**開校式／オリエンテーション**		本学 210 講義室
	10:00-12:00	**特別講義：教育方法** 状況に埋め込まれた学習（状況的学習論：正統的周辺参加論）	有元典文 横浜国立大学 教授	
	13:10-14:40	**対人関係論** 実習場面での対人関係スキル、アサーティブな自己表現　など	鷹野朋実 本学 准教授	本学 211 講義室
	14:50-16:20	**教育原理** 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観　など	山﨑裕二 本学 教授	
	16:20 -16:40	**オリエンテーション**		
8月４日（木）	9:50-10:50	**教育課程と実習の位置づけ**　教育カリキュラムと実習の位置づけ	企画委員	本学 201 講義室
	11:00-12:30	**教育心理** 人間の発達、学習過程における心理、学生の特性、状況的学習論　など	遠藤公久 本学 教授	
	13:30-15:00	**看護学概論** 看護の概念、ケアリング	守田美奈子 本学 教授	
	15:10-16:40	**実習指導概論** 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法　など	佐々木幾美 本学 教授	
8月５日（金）	9:45-10:30	**実習指導の実際**（演習Ⅰ-1） Group Work にて、実習指導案を作成	企画委員 実習担当教員	本学 201 講義室
	10:40-12:10	**特別講義：看護管理** 看護・医療の動向と実習	鶴田惠子 本学 教授	
	13:10-16:40	**実習指導の実際**（演習Ⅰ-2） Group Work にて、実習指導案を作成	企画委員 実習担当教員	
8月～11 月	**実習指導に関する実習**　自施設で実際に実習指導案の作成・実施・評価のプロセスを展開する（自施設にて） **他施設にて実習指導の見学（オプション 1）**　＊事前申込みされた方のみ			各施設
11月30日（水）	9:45-10:30	**実習指導のリフレクション** Group Work にて、実習指導についての振り返りの共有(経過報告)	企画委員 実習担当教員	本学 講義室
	10:40-12:10	**特別講義：看護倫理** 看護と倫理、実習指導と倫理	高田早苗 本学 学長	
	13:30-16:20	**ＯＢ会（フロンティアセミナーとの共催企画）** **・講演「教える」を超えた「学び合い」の実現へ**　西田朋子先生本学 本学准教授 **・実践報告　実習指導者研修会の学びを実践に活かす**　城下香 横浜みなと赤十字病院 **学生指導って楽しい！**　渡邉友里恵 葛飾赤十字産院		
平成 29 年 1月25日（水）	9:45-12:00	**実習指導の実際**（演習Ⅱ）Group Work 立案した実習指導案の振り返りと、実際の実習指導で得た学びの共有	企画委員 実習担当教員	本学 講義室
	12:05-12:30	**修了式・閉講式**		

資料２　平成 28 年度　実習指導者研修会アンケート結果

■第 1 回アンケート

実施日：平成 28 年 6 月 22 日（水）

研修生 72 名（1 名欠席）

回答方法：web（C-Learning）もしくは紙媒体

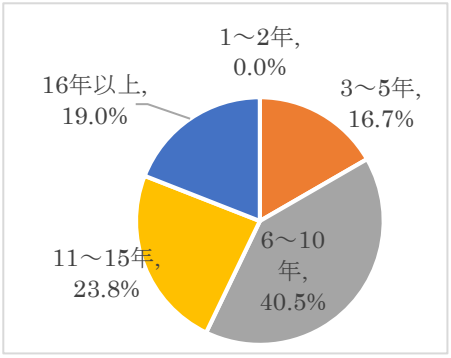
回答者数：42 名（web　37 名、紙 5 名）

回答率：58.3%

Ⅰ．受講生の背景

1．臨床経験

1～2 年	3～5 年	6～10 年	11～15 年	16 年以上
0	7	17	10	8
0.0%	16.7%	40.5%	23.8%	19.0%



2．役職について

管理職（師長・係長・主任）である	管理職ではない
6	36
14.3%	85.7%

3．病院内・病棟での役割（複数回答可）

教育関連の委員	実習指導者	プリセプター	病棟内での勉強会係	特にない	その他
10	28	5	9	7	13
3.9%	38.9%	6.9%	12.5%	9.7%	18.1%

Ⅱ．本研修会をどこでお知りになりましたか。（複数回答可）

病院から	師長から	同僚・知人から	本学の懇親会	本学の HP	本学の教員から	その他
12	19	7	4	0	0	3
26.7%	42.2%	15.6%	8.9%	0.0%	0.0%	6.7%

Ⅲ．本日の内容についてお伺いいたします。

	とても よかった	よかった	どちらでもない	あまり よくなかった	よくなかった
1．全体的な プログラム	20	22	0	0	0
	47.6%	52.4%	0.0%	0.0%	0.0%
2．「教育方法」	27	14	1	0	0
	64.3%	33.3%	2.4%	0.0%	0.0%

3.「対人関係論」	17	23	2	0	0
	40.5%	54.8%	4.8%	0.0%	0.0%
4.「教育原理」	15	23	4	0	0
	35.7%	54.8%	9.5%	0.0%	0.0%

■第２回アンケート

実施日：平成 28 年 8 月 4・5 日

研修生：72 名

回答方法：web（C-Learning）もしくは紙媒体

回答者数：53 名(web 48 名、紙 5 名)

回答率：73.6％

Ⅰ．8 月 4、5 日の研修会の内容についてお伺いいたします。

	とても よかった	よかった	どちらでもない	あまり よくなかった	よくなかった	聴講して いない
1. 全体的な プログラム	21	32	0	0	0	-
	39.6%	60.4%	0.0%	0.0%	0.0%	-
2.「教育心理」	13	29	5	0	0	1
	27.1%	60.4%	10.4%	0.0%	0.0%	2.1%
3.「看護学概論」	21	24	8	0	0	0
	39.6%	45.3%	15.1%	0.0%	0.0%	0.0%
4.「実習指導概論」	16	31	6	0	0	0
	30.2%	58.5%	11.3%	0.0%	0.0%	0.0%
5. 特別講義： 看護管理	30	23	0	0	0	-
	56.6%	43.4%	0.0%	0.0%	0.0%	-
6. グループ ワーク	29	23	1	0	0	-
	54.7%	43.4%	1.9%	0.0%	0.0%	-

■第３回アンケート

実施日：平成 28 年 11 月 30 日

研修生：72 名

【午前中】

回答方法：web（C-Learning）もしくは紙媒体

回答者数：25 名(web 17 名、紙 8 名)

回答率：34％

Ⅰ．プログラム内容についてお聞きします。

1. リフレクションについて

とてもよい	よい	どちらでもない	あまりよくない	よくない
8	15	1	1	0
32%	60%	4%	4%	0%

2. 特別講義「看護倫理」の講義について

とてもよい	よい	どちらでもない	あまりよくない	よくない
7	16	2	0	0
28%	64%	8%	0%	0%

【午後】

フロンティアセミナー（フロンティアセミナー・実習指導者研修会共同企画）

回答方法：紙

回答者数：20 名

回答率：27%

1.フロンティアセミナーについてお聞きします

セミナーの内容について

	とてもよかった	よかった	普通	あまり よくなかった	よくなかった
1. 基調講演	10	7	3	0	0
	50%	35%	15%	0%	0%
2. 実践報告	11	7	2	0	0
	55%	35%	10%	0%	0%
3. セミナー全体	7	10	3	0	0
	35%	50%	15%	0%	0%
4. 会場設営	7	6	6	1	0
	35%	30%	30%	5%	0
5. スタッフ対応	8	8	4	0	0
	40%	40%	20%	0%	0%

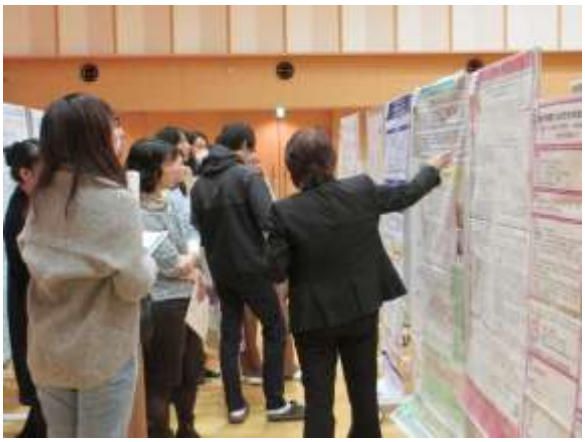
B. 地域連携部門

1. ケアリング・フロンティア広尾

ケアリング・フロンティア広尾は、日本赤十字看護大学が日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社医療センター附属乳児院、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社幹部看護師研修センターの 5 施設と連携することで、研究、教育と実践をリンクさせ、自らの施設にとどまらず、広尾地区全体の発展に寄与しようと立ち上げました。現在では、多種多様なプロジェクト活動を展開しています。

a. リサーチ・フェスタ

平成 28 年 11 月 2 日（水）18 時 10 分から 19 時 30 分に日本赤十字看護大学広尾ホールにおいてリサーチ・フェスタを開始した。リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指したものである。今年度 4 回目の開催となり、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学などから、看護職、教員、学生など 63 名が参加した。ポスター展示・発表された演題は 27 演題であり、その他、日本赤十字看護大学助成金による奨励研究やケアリング・フロンティア広尾の活動報告も合わせて行われた。研究よろず相談やリサーチ・カフェでは、楽しい雰囲気の中で研究相談や情報交換がなされ、参加者からも日頃の業務から離れての自由で活発な交流ができたとの反応がみられた。



▲ポスター展示・発表の様子

▲リサーチ・カフェの様子

資料　リサーチ・フェスタ参加者アンケート

Ⅰ．参加状況

総出席者数 63 名　　アンケート回収数 24 名　　アンケート回収率 38.1%

所属

日本赤十字看護大学……22 名
日本赤十字社医療センター……2 名
その他……0 名

職業（複数選択者あり）

教員……8 名
大学院生……8 名
看護師……4 名
助産師……4 名

Ⅱ．参加理由（複数選択者あり）

興味のあるポスター・プレゼンテーションがあったから……10 名
ポスター発表をしたから……6 名
リサーチ・カフェ（研究よろず相談）……6 名
興味のある日本赤十字看護大学奨励研究があったから……4 名
ケアリング・フロンティア広尾活動報告に興味があったから……1 名
その他……1 名

Ⅲ．参加後の感想

1. 参加して良かった……そう思う 71%　ややそう思う 29%
2. 関心が近い人と交流できた
   ……そう思う 52%　ややそう思う 36%　どちらともいえない 8%　そうは思わない 4%
3. 研究へ取り組む意欲が高まった……そう思う 50%　ややそう思う 37%
   どちらともいえない 13%
4. 研究成果を実践で活用したい
   ……そう思う 23%　ややそう思う 50%　どちらともいえない 8%　そうは思わない 19%
5. 実践と研究のネットワーク作りのきっかけになった
   ……そう思う 44%　ややそう思う 30%　どちらともいえない 22%　そうは思わない 4%

Ⅳ．　自由記載欄

・席も多く、ゆっくり話をしながら研究について考えることができました。
・いつも会えない人に会えるチャンスとなります。
・忙しく過ごしていたので、少し研究室を離れてカフェのような雰囲気の中でゆっくりと時間を過ごすことができました。

b. My Turn（私の出番！）プロジェクト

年度	平成 28 年度　報告書
プロジェクト名	My Turn （私の出番！）プロジェクト
プロジェクト リーダー	坂口千鶴
プロジェクト メンバー	坂口千鶴、千葉京子、清田明美、江見香月、比留間絵美、（日本赤十字社看護大学老年看護学領域）・老年看護学領域院生（修士）・学部生ボランティア
会のねらい	日本赤十字看護大学周辺に在住し、人生経験の豊富な 65 歳以上の住民と看護を学ぶ多くの若者とがお互いに交流する場をつくることを目的とする。
今年度の報告 （概要）	＜第１回マイターンカフェ＞ 実施日：平成 28 年 4 月 27 日（水）2 限 テーマ：ハーブボランティアを通して思うこと カフェ・オーナー：レクロスでボランティアをされている高齢者の方 実施場所：総合福祉センター（レクロス）のハーブガーデン、本学講義室 204 参加者：学部学生 8 名で、老年看護領域教員 4 名 カフェ内容：前半は、オーナーの方からレクロスのハーブガーデンを訪れ、ハーブの育て方、種類等の説明、利用者の方への活用等について説明を受けた。その後、大学に戻り講義室で、オーナーの方から、ハーブボランティアになった経緯を語って頂き、実際様々なハーブティーを試飲する機会を得た。 ＜第２回マイターンカフェ＞ 実施日：平成 28 年 6 月 1 日（水）2 限 テーマ：カウンセリング ;「話を聴く」ということ カフェ・オーナー：長年カウンセリングをされてきた高齢者の方 実施場所：本学協同研究室 1 参加者：学部学生 8 名で、老年看護学修士院生２名、老年看護領域教員 5 名 カフェ内容：オーナーの方の生きてきた人生、その中での病気、障害に直面して、カウンセリングにかかわるようになった経緯について説明があった。その後、カウンセリングの理論的背景（カール・ロジャース)、その中で傾聴の姿勢の重要さについて、学生との質疑応答も交えながら説明していた
次年度の予定 （概要）	今まで 4 年間実施してきたが、医療センターと総合福祉センターともに企画への参加者は募れず、またマンション自治会等への参加も事務の方に依頼したが、その機会も与えられなかった。ただ、カフェ実施後の学生の感想では、「高齢者の人間としての大きさや優しさに感動した」等との肯定的な内容が多く、また研究によって高齢者の参加後の気持ちには肯定的内容が多くあったことから、マイターンプロジェクトの意義は大きいと考える。今後、大学内では実施を継続していく予定であり、また「最期まで自分らしく生きる」プロジェクトの中で、マイターン方式として取り入れることも検討していく。

c. 高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト

年度	平成 28 年度　報告書
プロジェクト名	高齢者の終末期ケアに関するプロジェクト
プロジェクト リーダー	坂口千鶴
プロジェクト メンバー	川上潤子（日本赤十字社医療センター)、岡本薫（日本赤十字社総合福祉センター)、坂口千鶴・千葉京子・清田明美・江見香月・比留間絵美（日本赤十字看護大学老年看護学領域)、老年看護学領域院生（修士）
会のねらい	高齢者の終末期の定義、終末期のケアの構造が不明確な状態の中、病院、施設、在宅で高齢者の看取りをどのように行っていくのか、そのケアシステムを構築することを目的とする。平成 28 年度は、コアメンバー、スタッフ等の話し合いの結果を踏まえ、終末期にある高齢者とその家族へのケア（連携も含めて）について具体的なプログラムを立ち上げ、実施する。
今年度の報告 （概要）	平成 26 年度、平成 27 年度の活動をもとに、平成 28 年度では「老年看護コース：最期までその人らしく生きることを支えるケア」という全 5 回のコースを立ち上げた。 6 月に第 1 回講演会を開催し、17 名（医療センター11 名、訪問看護ステーション 3 名、レクロス 3.名）がコース参加者となった。事前学習を行いながら、9 月、11 月、1 月に 5-6 人を 1 グループとした事例検討と発表を行い、2 月に講演会「最期までその人らしく生きることを支えるケア - “これまでの想い”を“これからの想い”につなぐ役割 - 」を開催した。 事例検討では、事前学習をもとに実践した高齢者の事例を振り返り、高齢者や家族の意思を尊重する難しさについて話し合われた。組織を超えた看護師同士が話し合うことで、様々な視点から看護を検討することができ、新たな気づきを得るとともに共通の課題を認識していた。話し合いをふまえ、参加者は高齢者あるいは家族の視点から自らの看護を再考し、次の看護実践にいかそうとする姿勢がみられた。
次年度の予定 （概要）	平成 29 年度は、医療センター、総合福祉センターだけでなく、広尾地区等の病院、施設、訪問看護ステーションにも拡大して対象者を募り、全 5 回の老年看護コースを開催する予定である。 また、広尾地区の住民を対象に「最期まで自分らしく生きるとは」をテーマに、日本赤十字大学、医療センター、総合福祉センター、他大学（聖心女子大学、國學院大學等々）でコンソーシアムを組み、5 回程度のセミナーを行っていく予定である。

d. 広尾地域防災プロジェクト

プロジェクトメンバー	日本赤十字看護大学（小原・亀井・織方）; 日本赤十字社医療センター(丸山・大和田・板垣・高木・加藤）; 総合福祉センター（岡本・清水・関口）; 乳児院（臼井）; 助産師学校（近藤）; 研修センター（赤塚・武口）; 渋谷区医師会（渡辺・高橋）; 渋谷区（倉増・宮島・大塚・中野）の 21 名
プロジェクト目標	広尾地区の日赤 6 施設（看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター）の連携と各施設の防災機能の強化と人材育成、災害時のスムースな連携を目的とする。さらに行政、住民組織等を巻き込み、広尾地区における防災連携範囲を広げる。
平成 28 年度の報告	上記目標に基づいて、3 つの班（1. 防災訓練班 ; 2. 住民参加型イベント班 ; 3. 広尾地区災害連携マニュアル班）に分かれ活動した。以下、各班の活動について報告する。 **1. 防災訓練班の活動** 1）氷川地区連合防災訓練 : 5 月 22 日（日）実施。内容は「トリアージ実演」を担当（20 分×2 回)。参加者は氷川地区住民 200 名程。参加住民の感想は、傷病者メイクを施したことで臨場感があり、トリアージについても軽傷者は優先度が低いこと等が理解できたとの声が聞かれた。実施後の課題は、実際の災害場面を想定し身近な物品で実演してみることや、高齢者の参加が多かったことから若年層の参加促進などが挙げられた。 **2. 住民参加型イベント班の活動** 1）災害ワークショップ「自分たちの住む地域の防災力を知ろう」: 12 月 4 日（日）実施。内容は、地震発生後の家族の避難経路のシミュレーションをグループに分かれて行った。参加者は 25 名（スタッフ含む)。参加者の感想は、災害時の地域の強み弱みを知るきっかけになったり、シミュレーションによって災害想定や避難準備ができる等が聞かれた。実施後の課題は、地域住民の参加が少なかったことから参加者の層の拡大が挙げられた。 2）他イベントへの参加の打診 渋谷区より、「防災フェス　渋谷 2017」への参加の打診があった。地域住民の参加促進のためにも、プロジェクトとして貢献できそうなことがあればニーズを聞き、参加登録することとなった。 **3. 広尾地区災害連携マニュアル班の活動** 「広尾地区 6 施設の施設状況・支援受援体制」について、「支援・受援についての連携構想可視化シート」を完成した。実施後の課題として、29 年度にシートを基にした施設のハザードとニーズの文章化を行い、施設連携上の課題を洗い出すことが挙げられた。
次年度の予定	課題として、参加者の年齢層・地域住民の参加の必要性が挙げられた為、これらについて広報活動を行うこと、プロジェクト側からも出向いてニーズに基づき貢献できるよう活動を継続する。

e. TRC 研究会（Total Renal Care）

年度	平成 28 年度　報告書
プロジェクト名	TRC 研究会（Total Renal Care）・腎不全ケア研究会
プロジェクト リーダー	石橋由孝（日本赤十字社医療センター） 守田美奈子（日本赤十字看護大学）
プロジェクト メンバー	古川祐子、加藤ひろみ、関根光枝、池田美里、渋谷紋子、今井早良、宮副麗子（日本赤十字社医療センター）本庄恵子、住谷ゆかり、酒井千恵、安島幹子、田邊美乃（日本赤十字看護大学）
会のねらい	個々の患者に最適な全人的総合的腎不全医療（包括的腎不全医療：Total Renal Care:TRC）の推進・普及を目指す。「学は分野横断的」、「実践は地域一体型」という理念のもとに、学と実践の有機的交流を通じた、新たな腎不全医療モデルの創造を目的とする。
今年度の報告 （概要）	① 平成 28 年 4 月から月 1 回のグループミーティングを継続した：日本赤十字社医療センターの腎不全患者への外来における多職種協働の支援システムと支援方法について話し合った。 ② 平成 28 年 5 月に①に関するまとめを冊子として作成（カンファレンス、面談、保存期情報共有シート、ピアラーニング、学習ツール）した。 ③ この冊子をさらに改良し、新たな項目を追加し完成版原稿を作成した。 ④ 平成 29 年 5 月にまとめの冊子を配布予定である。
次年度の予定 （概要）	① この冊子（マニュアル）をもとにした院内教育などの企画案を検討する。 ② 平成 29 年度は、ミーティングを継続し、事例収集を行う予定である。 ③ 今後の研究継続のための研究費の申請計画を検討する。

f．セルフケア能力を高める支援の検討会（SCAQ 研究会）

年度	平成 28 年度　報告書
プロジェクト名	セルフケア能力を高める支援の検討会（SCAQ 研究会）
プロジェクト リーダー	古川祐子（日本赤十字社医療センター）
プロジェクト メンバー	古川祐子、加藤ひろみ、加藤まこと、那須照代、池田美里、滋田泰子、スミス美保子、石井佳代、今野康子、渋谷紋子、宮副麗子、小林千恵、及川麻衣子、寺尾多恵子、本宮美幸、矢野京子（日本赤十字社医療センター） 本庄恵子、田中孝美、和田美也子、下村裕子、桐原あずみ、細井美沙子（日本赤十字看護大学）
会のねらい	入院―外来通院－在宅療養を視野に入れ、一人ひとりの生活を視野に入れたセルフケア支援を展開することをめざす。志を同じくする仲間を募り、広尾地区の赤十字から、セルフケア支援を世の中に向けて発信する。
今年度の報告 （概要）	（1）　SCAQ 研究会（月に 1 回　開催）：日本赤十字社医療センターで、月に 1 回 1 時間、研究会を開催し、セルフケア支援を展開する方略を練った。 ★アクション・リサーチ：「地域中核病院における病棟－外来－地域をつなぐセルフケア看護支援の構築」を、赤十字助成金の助成を受けて実施している。地域にいかにつなぐかを今年度から来年度にかけての重点課題として取り組むこととなった。 （2）事例検討・活動検討：SCAQ を活用したセルフケア支援を実施した看護師が、事例を提示し検討した。病棟内でセルフケア支援を広める方略や、病棟と外来間での連携について報告しあい、検討した。この結果は、院内研究発表会や、日本赤十字看護大学で開催されるセルフケア研究会（公開）で、発表した。 （3）電子カルテへのセルフケア支援記録の導入準備：SCAQ を使用したセルフケア支援を記録できるように、SCAQ スコアと支援内容の記入、および、SCAQ のレーダーチャート（エクセルファイル）の使用をプロジェクトメンバーで進めた。これらの記録を電子カルテに入れることが決定し、その準備を進めている。 （4）院内教育にセルフケア支援教育を取り入れることの検討：プロジェクトメンバーが院内の教育企画室と連携して、平成 29 年度以降の院内教育に「セルフケア支援」を学べるコースを設定することについての協議を進めた。
次年度の予定 （概要）	（1）　定例研究会と事例検討の継続、メンバーの追加：月 1 回の定例研究会を継続し、地域につなぐことに力を発揮できるメンバーの追加を検討する。 （2）　院内への活動の周知：セルフケア支援を院内教育の一つに位置付けた。第 1 回目の研修として研修内容を検討し、研修運営に協力する。研修参加者のフォローアップとしてセルフケア支援を推進する。 （3）　病棟－外来―地域が連携し、患者のケアに役立てる：病棟と外来での継続支援、訪問看護部門との連携について具体的な方法を決める。 ＊平成 28-29 年度赤十字助成金の助成を受けた活動を継続する。

g. シームレスな看護師教育モデルの検討

年度	平成 28 年度　報告書
プロジェクト名	シームレスな看護師教育モデルの検討： しなやかな葦のような強いナースを育てる会
プロジェクト リーダー	川上潤子（日本赤十字社医療センター）
プロジェクト メンバー	川上潤子、渡邉美香、後藤薫、加藤まこと、高橋有希、鬼頭幸子、野口歌奈子（日本赤十字社医療センター） 江本リナ、本庄恵子、守田美奈子、佐々木幾美、西田朋子、（日本赤十字看護大学）
会のねらい	教育現場と臨床が相互に協力しあい、基礎教育から継続教育に至るまでのシームレスな教育モデルを検討する。また、骨太のナース、しなやかな葦のような強いナースを育むことをめざす。
今年度の報告 （概要）	今年度は計 3 回のプロジェクト会議を行い、新人看護職員研究を評価することを目的に、臨床経験 2 年目および 3 年目の看護師を対象にした研究を計画・遂行した。 大学および臨床の倫理審査を経て、臨床経験 2 年目および 3 年目の看護師から参加者を募り、2 年目 2 名、3 年目 2 名の計 4 名の看護師によるグループインタビューを実施した。1 回目は 4 名合同のグループインタビューを行い、2 回目は臨床経験 2 年目のグループと臨床経験 3 年目のグループに分けてインタビューを行った。 1 回目のインタビューの結果、卒後 2～3 年目の看護師が捉える新人研修の体験は、【成長の実感】【先輩からの具体的なアドバイスによる実践のイメージ化】【理想と現実の往復】【同期同士で分かち合う】【大学での基礎的な学びを実践に活かす】の 5 つに分類された。新人看護師研修は、学生時代に身につけた知識や技術の応用を学び実践をイメージ化させたり、理想と現実のギャップを埋めたりする機会となっており、同期同士の話合いや他者からのフィードバックがそれを促すことが示唆された。 これらの結果の一部をまとめ、第 19 回日本赤十字看護学会の演題登録を行った。 尚、本研究は、平成 28 年度一般財団法人日本赤十字社看護師同方会看護研究助成を受けて行った。
次年度の予定 （概要）	①今年度に行ったグループインタビューを基にした結果の一部を、平成 29 年度に開催される第 19 回日本赤十字看護学会で発表する。 ②臨床経験 2 年目と 3 年目の看護師を対象にしたグループインタビューの分析を行う。 ③グループインタビューによる結果を基に、看護基礎教育との連続性や、看護実践能力の獲得、キャリア発達の視点から分析を重ね、新人看護職員研修の評価について検討する。

h. 小児看護研究会　CandY（Children and You）

子どもと家族にかかわる看護師やその他の専門職者が、実際に臨床場面で対応に困っていること、援助の方向性について悩んでいることについて、事例を通して考えたり、小児看護に関連したテーマについてディスカッションしたりすることを目的に、小児看護研究会を行っている。平成 28 年度は全 9 回行った。詳細は以下の通りである。

対象　子どもと家族にかかわる看護師、およびその他専門職者
参加費　500 円／年間（資料・お茶代として）
会場　日本赤十字看護大学内

	日時	場所	テーマ	出席者
第 1 回	4 月 20 日（水） 13:00～14:30	205 教室	ダウン症児を受け入れられない家族への看護	15 名
第 2 回	5 月 25 日（水） 13:00～14:30	205 教室	子どもから通級の希望があるにも関わらず家族からその拒否を受けた時のアプローチ方法について	16 名
第 3 回	6 月 15 日（水） 13:00～14:30	205 教室	思いやりと気づかいができる組織づくり―子どもと家族から学び、先輩と後輩とが支え合う組織をつくる―	17 名
第 4 回	7 月 20 日（水） 13:00～14:30	205 教室	出生後に急変し医療的ケアが必要となった子どもと家族への退院へ向けた意思決定支援	14 名
第 5 回	9 月 14 日（水） 13:00～14:30	205 教室	医療的ケアを必要とする子どもの在宅移行支援における情報共有と家族との協働について	14 名
第 6 回	10 月 12 日（水） 13:00～14:30	207 教室	障がい児たちの在宅生活・病院以外での看護師の働き	14 名
第 7 回	12 月 21 日（水） 13:00～14:30	205 教室	長期的な入院治療の上終末期を迎えた思春期男児への看護	17 名
第 8 回	1 月 25 日（水） 13:00～14:30	205 教室	気管切開が必要な子どもの尊厳を守る看護と家族の意思決定支援 ―予定―	
第 9 回	2 月 22 日（水） 13:00～14:30	205 教室	小児看護学修士論文発表会 ―予定―	

小児看護研究会の様子
Children and You (CandY)

i. UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース基礎セミナー

28 年度	平成 28 年度　報告書
プロジェクト名	UNICEF/WHO 母乳育児支援 20 時間コース基礎セミナー
プロジェクト リーダー	日本赤十字社医療センター　看護部中根直子
プロジェクト メンバー	日本赤十字社医療センター： 川井由美子　大野芳江　中村志津佳　趙嬉瑛　廣瀬孝子 日本赤十字看護大学：井村真澄
会のねらい	赤ちゃんにやさしい病院運動（Baby-Friendly Hospital Initiative）における母乳育児を保護・支援・推進できる病院スタッフの知識、技術、態度を育成する。 母親と赤ちゃんにやさしいケアを提供できるためには、スタッフ同士がやさしくサポートし合える関係を体験し、築くことが重要である。会においてはスタッフ同士のコミュニケーション能力やエモーショナルサポート能力、ピアサポート能力も育成する。
今年度の報告 （概要）	「UNICEF/WHO 母乳育児支援ガイド　ベーシックコース」（医学書院）のテキストにそって 3 日コースを開催した。 日にち：3 月 12 日、4 月 9 日、5 月 15 日　各々8：00-17：00 開催場所：日赤医療センター3 階大会議室 トピック講義担当者（敬称略）医師：安藤、中尾、薬剤師：植松、助産師：井本、鈴木、滋田、赤山 事前の企画会議を複数回実施、名簿作成、資料準備、講師依頼・調整、当日の講義およびファシリテーション、事後ブリーフィングミーティング、コース終了後の感想レポート確認を行い、次回の課題抽出と企画につなげた。
次年度の予定 （概要）	20 時間コースの開催日を 7 月 8 月 9 月の毎月 1 回とする予定。 運営主体を初めて看護部においたが、次年度は 20 時間コース担当に委譲する方向で検討する。

C. 災害看護部門

1. 武蔵野市地域防災活動部会

a. 地域防災活動ネットワークについて

地域防災活動ネットワークは、本学と統合前の日本赤十字武蔵野短期大学が平成 15 年度より活動を開始している。地域の人々とともに身近な防災の知恵と技を獲得し、災害に強い人材を育成することをねらいとし、平成 28 年度で 14 年目である。

武蔵野キャンパスを中心に武蔵野市民防災協会、行政と協働し、防災ボランティアセミナーを開催してきたが、本年度は 14 年間の集大成ともいうべき、新たなセミナー企画として年間 11 回（平成 28 年 10 月～平成 29 年 3 月）の**「避難支援活動協力員養成講座」**を開講した。昨今、行政や地域での災害対策の必要性が求められている影響もあり、平成 28 年度は受講者の人数も増加し、年齢や地域の拡大等の変化がみられた。
セミナーの会場は武蔵野キャンパス解体に伴い、今年度から武蔵野市役所で開催している。

セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市とで拠出している。企画メンバーは本学教員、地域の自主防災組織所属の住民、赤十字社員、企業員、他大学教員、近隣の病院所属看護師と多岐に渡る。更に本学の学生災害救護ボランティアサークルがメンバーとして企画運営に加わり、参加者のファシリテーターとして機能していることが特徴である。また、本学学部 1 年生の必修科目「災害看護論 I 」の授業の一部を本セミナーへの参加に当てている。本学学生は、11 のプログラムの中からテーマを選択しセミナーに参加、地域住民と共にディスカッションやシミュレーションを通して交流しながら、地域防災について学習に取り組んでいる。学内では得られない住民との交流を通しての学びは、意義が大きい。

各回の参加者数は 64～119 名と幅があるが、地域住民および本学学生を合わせ、平成 28 年度の全 11 回のセミナー参加者延べ数は 960 名であった。報告として、前年の平成 27 年度（2015 年度）と平成 28 年度（2016 年度）の参加者の状況とアンケート結果をまとめる。なお、2016 年度は第 11 回までのセミナーであるが、傾向を把握するために、前年度と同様の第 10 回までをまとめた。

b. セミナー受講者の状況

(1) 受講者人数

セミナー受講者延べ人数は、2015 年度は 482 名（一般 311 名、学生 171 名）、2016 年度は 809 名（一般 645 名、学生 164 名）で 327 名の増になった。一般の受講者が 2015 年度 64.5%から 2016 年度 79.7%に増加した（図 1）。

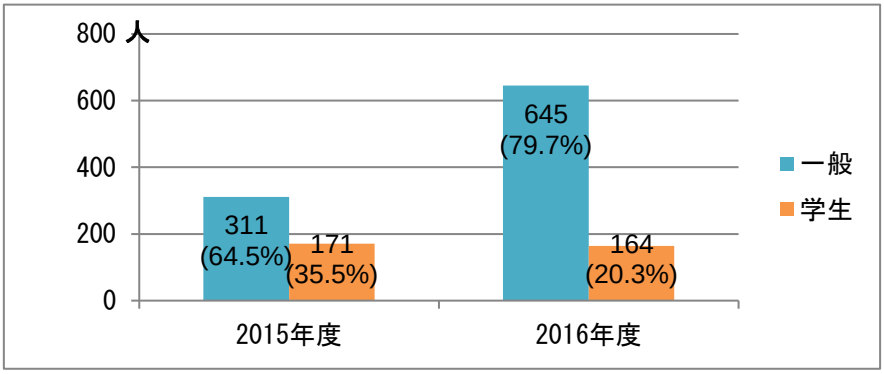


図 1. セミナー受講者人数（年度別）

(2) 受講者の年齢層

受講者の年齢層は、10～20 代、次に 70～80 代、60 代、50 代、40 代、30 代の順である。看護大学生が受講しているため、10～20 代が多い。しかし、年度別で見ると、2016 年は、10～20 代の一般の受講者も増えている（図 2）。

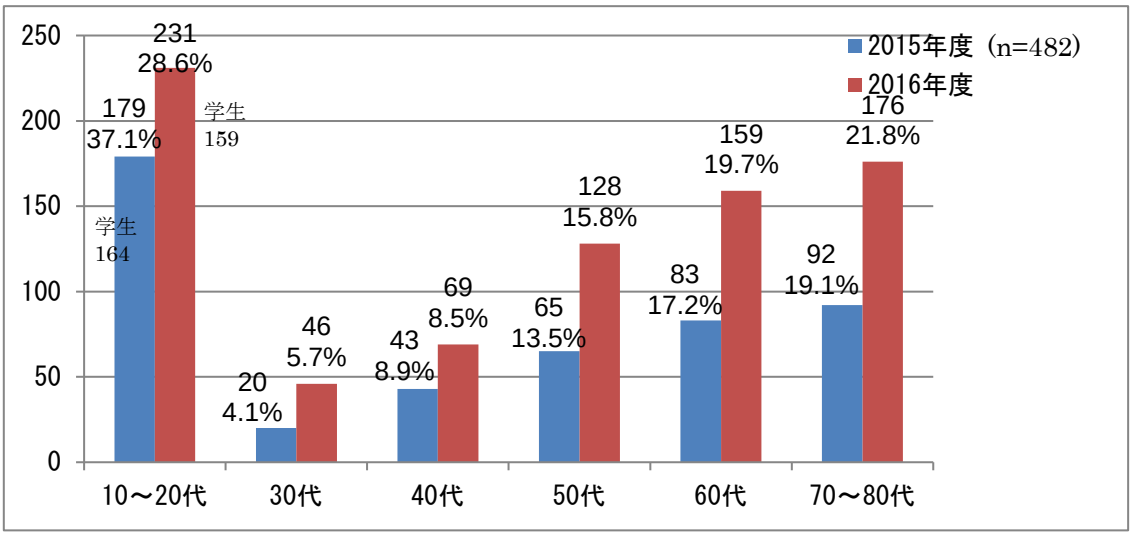


図 2. 受講者の年齢層(年度別)

(3) 受講者の居住地

受講者の居住地は、武蔵野市内 20.7%で、東京都内 47.1%、関東圏 28%である。年度別では、2016 年度は全体的に増加しており、その他の地域（中部圏、東北圏）へと拡大している（図 3）。

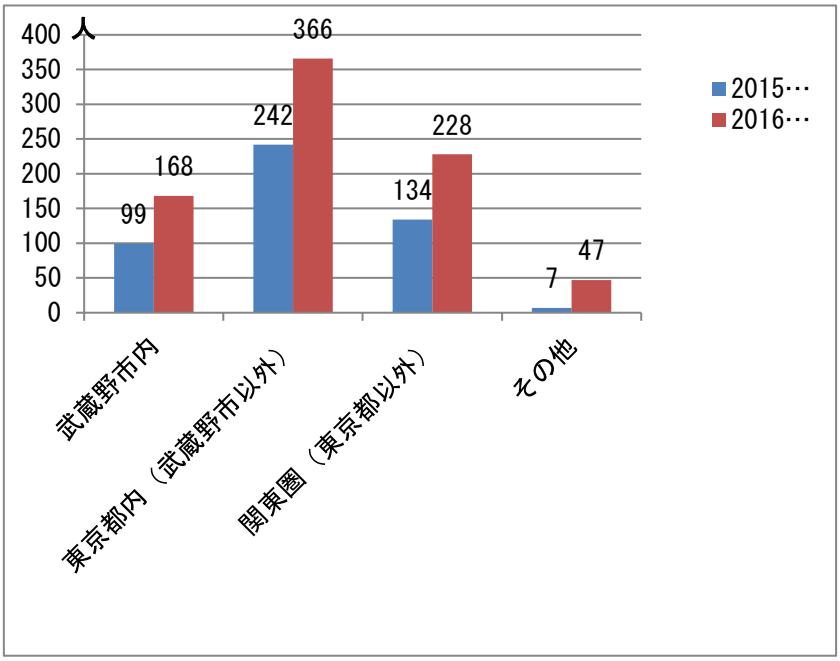


図 3. 受講者の居住地(年度別)

c. アンケート結果

地域防災セミナーの各回終了時にアンケートを実施している。アンケート参加は任意であり、回収箱への投函をもって同意とした。回収率は、2015 年度は 87%、2016 年度は 92%である。

(1) セミナーをどこで知ったか

セミナーをどこで知ったかは、「大学からの案内状」で知る方が最も多かった。知人からの紹介やその他の口コミで知った方も増えている。案内状は、主に前年度参加された方や共催および協力機関や武蔵野市の防災訓練時に配布を行っている。地域の防災推進員や自主防災組織の方も割合は少ないが増えているという傾向が見られ、防災関係者の地域の方への働きかけによるもの思われる。

(2) セミナー受講への動機

セミナー受講への動機は、「災害の知識や技術を得る、深める」が最も多く、ついで「いざという時に備えるため」「地域防災の役に立ちたい」ことを目的に受講される方が多かった（図 4)。また、「防災関係の役割を担っているため」と、首都直下地震が懸念され、地域での防災活動における役割意識が窺える。

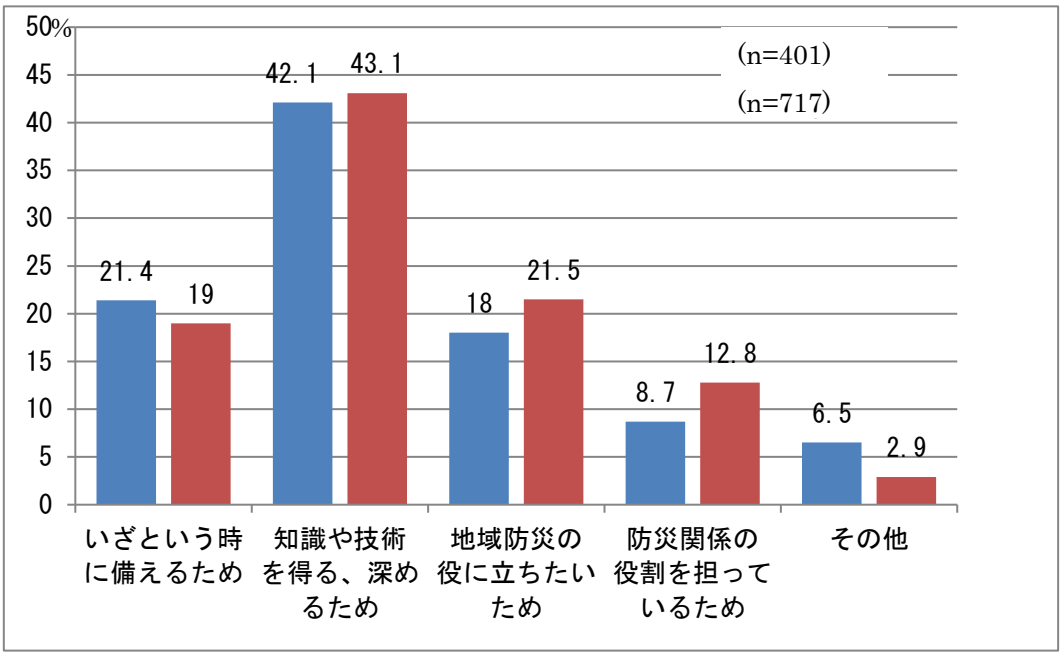


図 4. セミナー受講への動機（複数回答）

(3) 前年度までの地域防災セミナー受講経験の有無

前年度までに受講したことのある方は、2015 年度は 51.4%であった。2016 年度は、新たに「避難支援活動協力員養成講座」として開催したため、受講経験無しの方が 68.1%に増えた（図 5)。

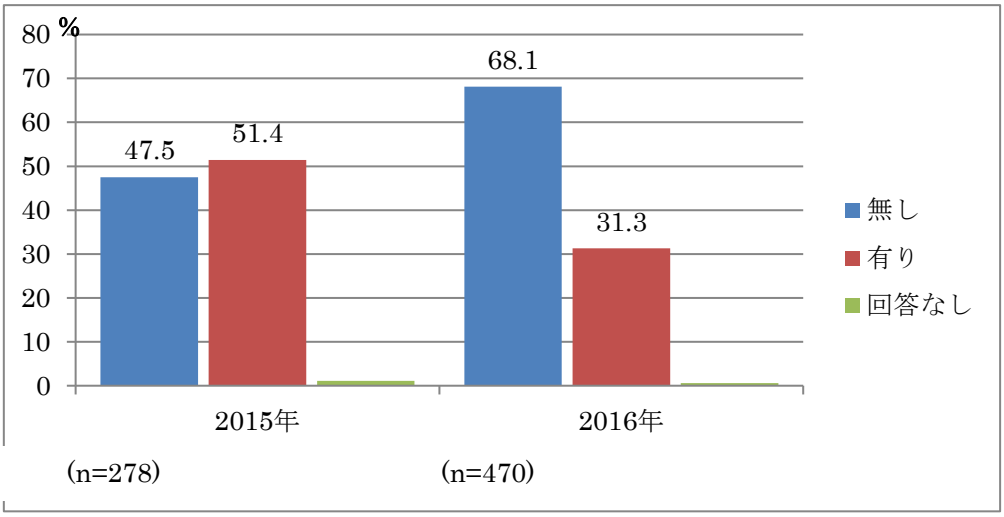


図 5. 前年度までの地域防災セミナー受講経験の有無

(4) セミナープログラムに対する評価

セミナープログラムに対する年度別評価については、両年度とも「非常によかった」「よかった」が 80%以上を占めている（図 6)。　評価の理由は、「興味のある内容であった」が最も多く、次いで「テーマが明確だった」「説明がわかりやすかった」であった。

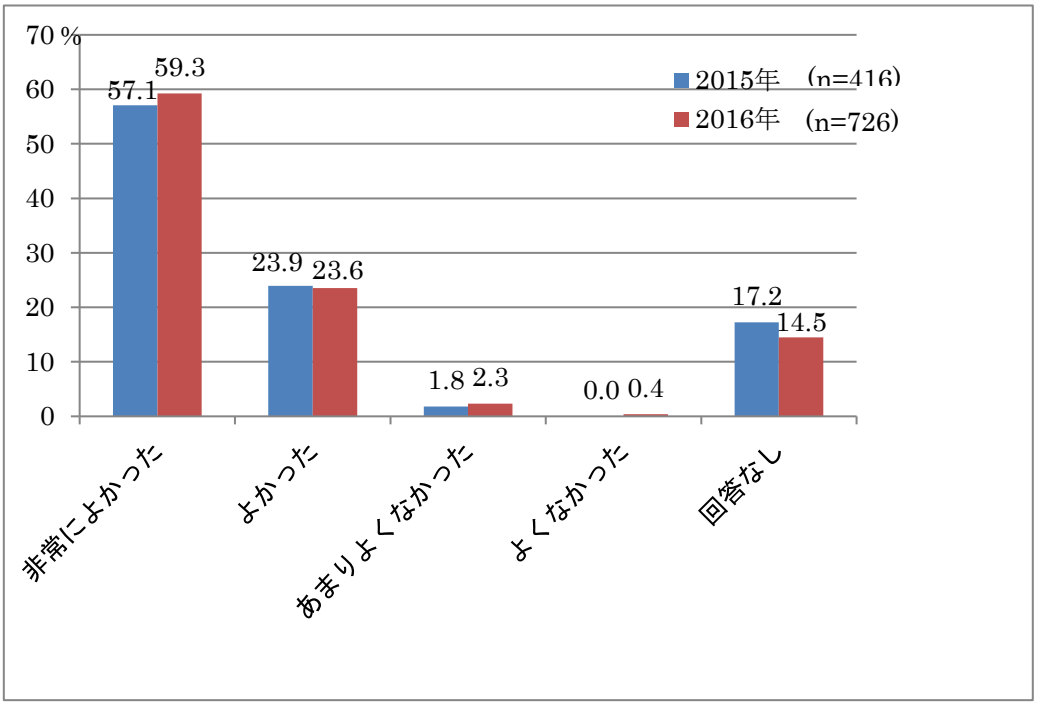


図 6. セミナープログラムに対する評価

(5) セミナー受講後、どのように活かしていこうと考えるか

「セミナー受講後、どのように活かしていこうと考えるか」(2016 年度) についての自由記述内容を分析した。「災害時に活かす」「被災地でのボランティア活動に活かす」「避難所運営に活かす」「地域防災に活かす」「協力員として活動する」「得た災害時の知識を家族、知人、会社で共有する」「災害時の備えと見直し」「日常で活用する」などが述べられている。

d. まとめ

14 年間にわたる武蔵野地域防災セミナーでは、「官」「学」「民」が一体となって地域防災活動に取り組んでいる。首都直下地震、南海トラフ地震などが懸念される昨今、行政のみならず、地域住民にとっても防災対策は喫緊の課題である。受講者は、武蔵野市内のみならず、東京都内、関東圏、東北圏、中部圏に拡大していることからも、「地域防災セミナー」の果たす役割は大きいと言える。「地域防災セミナー」で得た知識・技術・態度が日常や地域防災活動等で活用され、災害時の備えとしてさらに醸成されることを期待する。

№	日　時		内　　容	会　場
1	H28 10/22 （土）	9:30 ～ 12:30	開講式 1）地域ではじめる防災まちづくり、官民学との連携 2）災害の種類と災害サイクル及び避難指示発令時の対応	武蔵野市役所 防災安全センター 811 室 武蔵野市緑 2-2-28
2		13:30 ～ 16:30	3）DIG（Disaster Imagination Game）で地域を知る	
3	H28 11/12 （土）	9:30 ～ 12:30	4）避難支援活動協力員とは（役割、救助・救出、安否確認、避難行動支援） 5）災害時の判断力と支援者の心構え ―クロスロード(市民編またはボランテイア編)―	武蔵野市役所 防災安全センター 811 室 武蔵野市緑 2-2-28
4		13:30 ～ 16:30	6）要配慮者とは（福祉行政の取り組み、高齢者、母子、障がい者、児童等の特性） 7）　避難行動要支援者の安否確認と避難行動支援（搬送の演習含む）	
5	H28 12/10 （土）	9:30 ～ 12:30	8）避難所の開設における行政の役割と官民との連携、避難所の開設運営シミュレーション	武蔵野市役所 防災安全センター 811 室 武蔵野市緑 2-2-28
6		13:30 ～ 16:30	9）自宅及び避難所のトイレ使用の可否と対応 （シミュレーション）	
7	H29 1/28 （土）	9:30 ～ 12:30	10）避難所体験と公衆衛生、要配慮者のお世話の方法(演習)	武蔵野市役所 防災安全センター 811 室 武蔵野市緑 2-2-28
8		13:30 ～ 16:30	11）安心した避難生活のための要援護者トリアージ －どう防ぐ震災関連死（自助、共助の視点から）－ 福祉避難室振り分け区分シミュレーション、対応策	
9	H29 2/18 （土）	9:30 ～ 12:30	12）被災者及び支援者のこころのケア演習 13）認知症サポーター講習(赤十字)	武蔵野市役所 防災安全センター 811 室 武蔵野市緑 2-2-28
10		13:30 ～ 16:30	14）在宅避難の備え（慢性疾患を持った住民の備え、活用できる医療・福祉対応）	
11	H29 3/11 （土）	9:30 ～ 12:30	15）フォーラム「どう活かす！？　避難支援活動協力員　私たちの知恵と技」 閉講式	武蔵野市役所 防災安全センター 811 室 武蔵野市緑 2-2-28

2. なみえプロジェクト

a. 背景

2012 年に日本赤十字看護大学と日本赤十字社事業局看護部（以後本社看護部とする）は、厚生労働省科学研究による「地域健康安全・危機管理システムの機能評価及び質の改善に関する研究、福島県いわき市区域に所在する東電福島第一原発周辺町村住民の保健ニーズへの対応に関する研究」を実施した。

この研究は被災地地域の保健所の活性化を図り、いわき市に避難した被災地域住民への円滑な保健サービス提供を行うことであった。しかし課題が多く、継続的な支援の必要性が示唆された。そこで、本学と本社看護部は 2013 年春より福島県いわき市区域に所在する東京電力福島第一原発周辺町村住民への支援のための活動の在り方を検討し、その経過で浪江町から支援要請があったため、この町の避難住民を支援することとした。浪江町は保健師の確保に苦慮していること、いわき市では借り上げ住宅居住であり住民の安否健康状態の把握が難しいという問題を抱えていた。この活動は資金を日本赤十字社、浪江町から受け、本社看護部と本学が共同で実施している。2013 年 10 月より開始し、今年度で 4 年間継続している。

b. 目的

本活動は、いわき市に避難した浪江町民を対象に健康調査と支援を行うことである。目的は①いわき市在住の全浪江町民を対象に、各家庭を訪問するなどの聞き取りによる健康調査を実施し健康状態を把握する。その結果から保健医療サービスが必要と判断される場合は、浪江町等関連組織と連携しながら支援につなげる。②アンケートを実施し浪江町民の健康状態と支援ニーズを把握する。③各家庭を訪問し健康状態に関する聞き取りを行うが、その際、単に健康状態を調査だけでなく、町民の生活や経験に耳を傾け、ナラティブ・アプローチに基づく「語りを聞くケア」の実践を行う。④健康調査結果の分析を行い、各種サロンを企画し運営する。⑤支援ニードに基づいた保健医療サービスの在り方やコミュニティ形成の在り方を検討する。

c. 活動概要

(1) 運営

いわき市における「日赤なみえ保健室」（浪江町の交流の場である浪江町交流間の 2 階に設置）は継続しており、スタッフを配置している。東京では本社看護部と本学担当者の運営に関する会議を 1 回/3 ヶ月実施した。日赤なみえ保健室では、浪江町保健師、担当保健所である相双保健所の支所から浪江町担当保健師、福島県心のケアいわきセンターの看護師、浪江町いわき市担当職員が集まり、健康支援に関する定期会議を 1 回/月実施している。この他に大学担当者は、二本松市にある浪江町仮設役場に 1 回/6 ヶ月訪問し、保健福祉課との情報交換など会議を行った。保健室スタッフは常勤事務職 1 名、非常勤保健師 1 名、非常勤看護師 1 名、非常勤栄養士 1 名を配置している。加えて、今年度も 5 月～9 月、10 月～2 月の間、全国の赤十字病院から 8 名、それぞれの看護師が 4 週間の派遣期間で勤務した。また大学院生 1 名がインターンシップとして通年を通し活動した。

(2) 活動の状況

今年度は①健康調査②母親と子どもの交流「ママさんサロン」③母親の運動による交流「母親ヨガサロン」④浪江住民の運動の場「一般ヨガサロン」を実施した。

①健康調査：2016 年 4 月～12 月までの実績は、家庭訪問 243 戸、電話による調査 286 戸、電話での応答なしまたは調査必要なしとの回答のケース 366 戸であった。電話をかけた合計件数は 1056 回であった。このうち、フォローとなったケースは 8 名であった。

②母親と子どもの交流「ママさんサロン」: このサロンは 2013 年 11 月から行っており、月に 2 回、10 時から 12 時まで母親と子どものサロンを実施している。4 月～12 月までの 1 回の平均参加者数は母親 6 名、子ども 7.4 名であった。活動内容ははじめの 1 時間は子どもと母親の交流を兼ねた遊び、後の 1 時間は、子どもは別の部屋で遊び、母親のみで会話を楽しむものである。また、季節の行事に合わせてお楽しみ会等も開催した。

③母親の運動による交流「母親ヨガサロン」④浪江住民の運動の場「一般ヨガサロン」: ヨガを行いたいとの要望があったため、2015 年 9 月から 2 回/月、乳幼児をもつ母親と壮年期以上の浪江住民に向けて 2 時間程度のヨガの会を行っている。講師としていわき市在住のヨガインストラクターを雇用した。4 月～12 月における 1 回の平均参加者は母親ヨガサロンが母親 7 名、子ども 6.6 名、一般ヨガサロンが 8.1 名であった。

d. 来年度の課題と展望

本事業における本社からの資金提供が今年度で終了する。浪江町の帰還はロードマップ上では平成 29 年度であるが除染作業やインフラ整備が進まない状況にあり、今後も避難継続が予測される。来年度は、浪江町からの資金のみで運営が決定しており、事業内容を健康調査に絞り、サロンの運営を縮小して継続する予定である。

3. くまもと支援プロジェクト

a. 背景

本年度 4 月に発生した熊本地震は 16, 17 日の両日にマグニチュード 7 という大地震が起こった。日本赤十字社は、DMAT、医療救護班、心のケア班、加えて被災した熊本赤十字病院には医師・看護師など医療者及びコメディカルや事務を派遣して支援を行った。これらの活動は 2011 年の東日本大震災において、またはそれ以前から組織的に行われる災害支援活動である。今回の震災においては、海外からの寄付金の活用という視点から、日本赤十字社本社事業局救護福祉課（以後、本社救護福祉部とする）が主体となり、7 月末までの事業を新たに行うこととなった。本事業に関して本社救護福祉部より、東日本大震災における福島原発災害被害者への支援経験のある日本赤十字看護大学へ専門家派遣の依頼があり実施することとなった。本事業は「平成 28 年熊本地震災害にかかる海外救援金を財源とした被災者支援事業」である。

b. 目的

避難所等に避難している被災者に対して、いのちと健康を維持するための保健衛生分野を中心とした事業を立案・実行し、被災者の健康状態を維持する。

また、事業を通じて被災者の心身の苦痛の軽減を図る。

c. 対象者

避難所に避難している被災者

d. 期間

平成 28 年 4 月 27 日から 7 月 31 日

e. 活動概要

(1) 組織と事業計画作成

本社救護福祉部は、本事業のために専従班を作った。メンバーは救護福祉部の部長 1 名を長として各課より集められた事務職員 6 名、顧問 2 名、本学からのテクニカルアドバイザーとして教員 1 名の構成であった。4 月 25 日より会議を行い、事業計画を作成し、27 日より 4 日間の現地アセスメント、その後本社の決裁を経て 5 月中旬より実働開始した。

(2) 事業内容と実施概要

対象地は避難者 1,400 人、家屋の損壊 1,431 件の被害を受けた西原村(西原村 2016/5/1 時点)を中心に被災 6 市町村であった。活動は物資支援、人的支援のハード・ソフト両面で行った。活動にあたり日赤が行った過去の災害支援分析、本震災直後から活動した救護班とこころのケア班の報告書から現状分析を行い、健康支援事業を企画した。その後、熊本県庁並びに被災町村、及び被災地域を管轄する保健所との要望とのすり合わせを経て事業サイトを決定し、実働を開始した。物資支としてミスト発生機、介護ベッド等を 5 市町村に提供した。ソフト面の支援に関しては西原村で実施し、住民課保健師等をカウンターパートとし、具体的には 4 つの活動を行った。

①震災により中断した乳幼児健診の再開：震災で損失した資機材提供と健診スタッフとして看護師派遣 2 回を行った。

②育児広場の開催：発災前から育児広場はあった交流会を「からいも広場」と名づけて 6 月 23 日から再開した。スタッフとして介護奉仕団、看護師等を配置した。実施は 4 日/週実施し、参加は母親 2-15 名/回、子ども 2-25 名/回であった。7 月 31 日「からいも広場」終了後は、子育て広場として継続している。

③柔道整体日赤ボランティアによる支援：村役場の職員が疲弊しているとの保健師の話があり、対象を役場職員中心とし、5 回実施した。柔道整体日赤ボランティアは 1 回の会に 2，3 名が参加した。利用者は 16-30 名/回であった。

④避難所の生活と健康支援:福祉避難所での保健衛生に関して依頼があり、看護師を日赤全ブロックから 18 班（2 名/班）37 人を派遣した。実施初日は日本看護協会災害支援看護師から引継ぎを受けて、夜勤から開始した。その後、遅番勤務を経て徐々に日勤のみの勤務へと変更して行った。自治体保健師と共同しての活動であった。

f. 学生の本事業における活動

大学院学生 4 名が 7 月下旬の 1 週間、専門家として活動する教員と帯同する形で、避難所などその他の日赤の支援活動の場でフィールドワークを行った。

g. 専門家の役割と課題

災害看護および災害時被災者支援の専門家として参加した。専従メンバーでの活動であったが、看護師は 1 名であったため活動企画全体に携わった。特に困難であった点は看護師による避難所支援を行うための交渉相手探しであった。それぞれの被災町村保健師は現場の活動で多忙であり、具体的な話を進めていくことが難しかった。今回、日赤の救護活動が県災害対策本部の中での活動であったことから、県医政関係看護職員らとの話し合いを持つことができ、この活動につなげることができた。今後の課題としては、看護師による避難所支援が今回限りとならないよう、災害時の日本赤十字社看護師の役割とするため日赤救護・支援活動に組み込み、研修を実施し、体制つくり等組織化すること、同時に企画運営には専門家として大学災害看護領域教員が加わり、質の向上を図ることであると考える。

平成 28 年度　日本赤十字看護大学　地域連携・フロンティアセンター実績報告
作成年月　　平成 29 年 3 月
発行　　日本赤十字看護大学　地域連携・フロンティアセンター
編集　　フロンティアセンター　広報
〒150-0012　東京都渋谷区広尾　4-1-3
日本赤十字看護大学
電話：03-3409-0875
FAX：03-3409-0589